

Vanerskolan 聾学校（国立聾学校）

1. 学校概要

1886年創立の国立聾学校である。



Vanerskolan 聾学校の外観

現在 52 人の難聴の子どもたちが在籍している。聾、難聴、CI 児、言語障害（聴児）の子どもが在籍している。1 クラス 10 人程度で構成され、各クラスに教員が 2 人配置されている。一人は手話を用いて、もう一人は音声を用いる担当になっている。0 学年から 10 学年までである。教員も生徒も FM マイクを装着している。聾の児童、難聴の児童の混合で授業をしている。



授業場面

今年（2012年8月現在）は52人の生徒と20人の教員が働いている。20人中6人が、聾または難聴の教員である。寄宿舎の職員、電子技術担当のスタッフ、臨床心理士（ろうスタッフ含む）などもある。スウェーデンの学校には、臨床心理士、ソーシャルワーカー、言語療法士、看護師により構成される学校保健委員会がある。すべての職員が手話を使える。給食室のスタッフも手話を使える。今後は（国の方針で？）言語障害児の受け入れは行えなくなってしまった。寄宿舎は全部で4つある。52人中18人が寄宿舎に住んでいる。各寄宿舎に4人前後の児童生徒が寄宿している。

本校の在籍児に対して責任を負う他に、1年に3週間他の学校に通っている子どもが手話の勉強をするために本校を利用する。その子どもたちへの責任も期間中担うことになる。聴覚障害や手話について講義を行っている。

2. 施設設備

1) 音楽室

リトミックを行なっている。床や壁のライトが音楽に同期して光ったり振動をする、音も聴くことができる。聾の子どもが音や振動を初めて感じた時はとても感動的である。1996年当時は、聾児のみの学校であった。当時は、体で音を感じるということを目的に活用していたが、現在は難聴児も受け入れているので、音楽を楽しむという目的でも活用されるようになった。



床が音楽に同調して振動する音楽室

2) シグナルシステム

部屋に入るときにはロックではなく、スイッチを押して入る約束になっている。スイッチを押すと、教室内のシンボルが光って聞こえない子どもにも分かるようになっている。入室者がいる、休み時間、緊急事態、電話のシンボルがあり、それが光ることで教室内の全員が知ることができる。



シグナルシステムを紹介する副校長

3) 手話の部屋

7台のカメラ付き PC が設置されている。自分が手話を使っている様子を録画することができる。それをあとになって比較してみることはとても面白いところである。

手話のトレーニングも行える。これは授業の一環として、手話を見て、文として書き取る(キーボード入力)という練習も行っている。1年生から(読み取った手話を文字化することは)行っている。0年生も用いるが、(読み取りだけで)書き取るトレーニングはここでは行わない。ビデオの内容の読み取りを教師とのやり取りを中心に行う。教材は、スウェーデン国内で購入可能なものを用いている。最近では、人気のある文学などをろう者のためにスウェーデン手話に通訳したもの(DVD?)を出している出版社が多くある。



手話の部屋

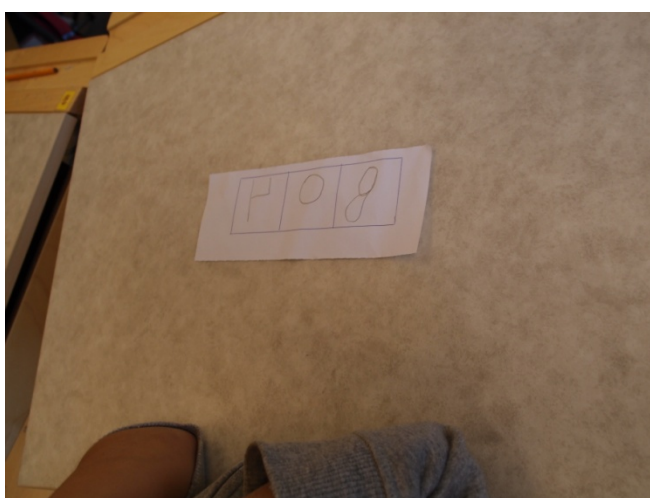
3. 書字障害のある児童への対応について

教員も児童生徒もマイクを用いている。教室には、ループシステムが設置されている。教員はスウェーデン手話を用いている。授業を見学した学級は8人学級で、1年から3年生の子どもが同じクラスに在籍していた。2人の教員と1人のアシスタントが配置されていて、一人が音声担当、一人が手話担当教員であった。黒板は、電子黒板でICTの活用が進んでいた。

下記の手を挙げている児童には視覚認知の弱さがあり数字なども鏡文字になってしまっていた。このような児童に対しては二人の教員の他にアシスタント（手前縞模様のセータの女性）が配置され、授業サポートを行っていた。



アシスタントが後ろについてサポート



「408」と書いたつもりが鏡文字になっている

4. 質疑応答

Q: 日本では聾児と難聴児は分けているか？

A: 明確には分けてない。

日本では、0歳児から聾学校に来ているので、聾と難聴ということをはっきりと分けて教育を行っていない。

Q: スウェーデンでの聾児と難聴児の定義は何か？

A: 聾は口話ができず手話のみを用いている子どもであり、難聴児は、聴覚活用ができて、口話を第一言語としている子どもである。全く聞こえていない子どもは HA を使っていないが、少しでも聴覚活用の可能性がある子どもは HA を付けている。あくまでも、スウェーデン手話を第一言語としている子どもを聾児と呼んでいる。

Q: 日本でも日本手話が主流か？

A: 日本語対应手話が主流である。

授業中であるかどうかや、だれと話しているかなどの状況によって対应手話と日本手話を使い分け（コードスイッチ）をしている様子が見られる。

Q: 聾児が手話の力を使って書き言葉に移行させるためのノウハウを教えてください。

A: ここに通う多くの子どもたちが難聴である。その子どもたちに対して言葉を入れるときには、音を活用して指文字を用いて、聴こえる子どもたちと同じように行う。

聾児については、音からは入れないので、名前を覚えるときには、まずは言葉の文字を絵（記号）として覚える。そして繰り返し、見て書くことを行う。これは、0年生から行う。0年生はアルファベットに力を入れている。

読み書きの時に言語を2つに分けて考える。ホワイトボードの画面の左半分は文字、右半分は手話映像を表示する。すると、語順が違うことがハッキリする。聾の子どもに、「車」を教えるときには、アルファベットと、指文字、手話を一組として繰り返し見せて行う。聾の子どもに関しては、いまは口形を使うことは強制ではない。昔は、強制的に口話であった時代があった。この学校は、スウェーデン手話とスウェーデン語を学ぶことが原則となっている。教科書については、通常学校とできるだけ同じものを用いるが進度は聾学校のペースで行われる。

5. 寄宿舎について

当学校には、4つの寄宿舎がある。男子寮・女子寮という区別はない。6歳から17歳の子どもが利用できる。利用資格は、本学に在籍していることと、自宅からの距離による基

準を満たしているということである。基本的に、寄宿舎を希望する待機児童はいない。お試しとして学校はすべての子どもに機会を保障する義務がある。利用費用は無料である。

今回見学した寄宿舎は、5人の子どもが利用しており、4人の職員がその寄宿舎で働いていた。4人の職員のうち、2人が常勤で、2人がパートであった。寄宿舎の職員も校長に採用されている。子どもたちは、月曜日の放課後に寄宿舎に来て、金曜日の夕方に自宅に帰るというサイクルである。部屋の清掃など基本的な家事は積極的に行うように指導している。調理は職員が行っている。



寄宿舎の外観（日本のイメージとは大きく異なる）

寄宿生は夕食がおおよそ16時で22時に夕食の一日4食（スウェーデンの典型的な家庭の時間）である。個室でほかにリ克雷ーションスペースもある。近隣の聴児との交流は手話を必要とする聾児は難しいようである。寄宿舎と学校は、公共のバスと、学校のバスを利用することができる。公共のバスには、聾学校直通の便もあるということだ。移動時間は、10分から15分程度である。アットホームな雰囲気のある寄宿舎である。



寄宿舎のダイニングルーム